様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００７２３

研究課題名（和文）日本語支援者の学び解明と促進を目指した多文化サービスラーニングの開発

研究課題名（英文）The development of multicultural Service-Learning: the analysis of Japanese language tutors' cognitive developments

研究代表者
北出　慶子（KITADE, KEIKO）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：６０３６８００８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、サービス・ラーニング正課科目の開発と多文化ボランティアを通した学びの明示化である。2022年度にサービス・ラーニング正課科目を開設し、その後の展開として2023年度には複数の地域多文化交流や日本語教室との連携基盤を構築することができた。また、学内の国際交流ボランティア参加を通した正課外の学び、オンラインによる多文化サービス・ラーニングの実施と学びの解明、官学連携の多文化共生推進プロジェクトにおける関係性の解明など、様々な調査からボランティアを通した学びの意義や設計に必要な観点を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の社会的意義は、サービス・ラーニング正課科目の開発や正課外の多文化ボランティアを通した学びの明示化により、多文化共生や地域在住外国人への支援を通した市民性の育成、そして地域と大学のより充実した連携の在り方の必要性とモデルを示したことが挙げられる。また、学術的意義としては、サービス・ラーニングと日本語教師教育の関係や、異文化理解の振返りワークショップなど、従来の日本語教育分野の枠組みを越えた学際的な知見の融合と成果発表にある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a service-learning regular course and clarify learning through multicultural volunteer activities. In 2022, we launched of a service-learning regular course, and establish a foundation for collaboration with several local multicultural exchange and Japanese language classes in 2023. In addition, we presented the significance of learning through volunteerism and the perspectives necessary for its design based on various surveys, including out-of-school learning through participation in international exchange volunteer activities on campus, clarification of online multicultural service learning implementation and learning, and clarification of relationships in multicultural conviviality promotion projects in government-academic collaboration.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語学習支援者　サービス・ラーニング　市民性教育　ピア・ラーニング　越境的学習　ナラティブ　地域日本語教育　官学連携

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

技能実習生や特定技能など、就労目的で来日、滞在する外国人への日本語教育の必要性および日本社会の多文化化への対応が急務となった。そのような社会の変化に合わせ、日本語教師の認定化および大学における日本語教師養成課程のカリキュラムの見直しが求められた。その中でも大きな変更点として、高度で学術的な日本語が求められる学位目的の留学生への日本語教育だけではなく、それぞれの学習者に必要とされる日本語教育の多様性が示され、就労目的、生活、外国につながる児童生徒の支援などに対応できる教師育成の必要性が提示された（文化庁，2019）。これを受け、大学における日本語教師養成の一貫で地域日本語教室にボランティアとして大学生が参加する正課・非正課の取組みも見られるようになった。このような経験は、多文化社会の市民性教育に繋がるという利点もある。一方で、地域日本語教室においては、「教える―教えられる（学ぶ）」といった日本人と外国人参加者の権力構造が顕在化されるといった危険性も問われている。以上の背景を踏まえると、大学生が地域日本語教室、または多文化交流の場に参加する際には、地域参加を通した学びを丁寧に設計する必要性が求められることが分かる。

２．研究の目的

本取組みでは、上記で述べたような多文化社会への地域参画を通した学びを促すことを目的として、（１）大学の日本語教師養成課程においてサービス・ラーニング（以下、SL）を取り入れた多文化 SL 科目の開発、および、（２）正課外での学生主体型の地域連携における学びの解明を目指した。日本語学習支援者側の学びに注目し、SL の理念設計である互恵性、能動的学習、体験への省察を導入することで、多文化間で学び合い、地域コミュニティと連携することのできる日本語教育人材および市民性の育成方法を提案することを目標とした。

３．研究の方法

本取組みで目指した２点について、その方法を目的別に述べる。

（１）サービス・ラーニング正課科目の開発

サービス・ラーニングの枠組みを利用した科目を日本語教師養成プログラムの中で開講するにあたり、まず、2020 年度は関連する研究会も複数回開催し、複数の地域多文化交流や日本語教室との連携基盤を構築した。その上で、サービス・ラーニングの枠組みを利用した科目を 2022 年度に開講した。

（２）多文化ボランティアを通した学びの明示化については、以下３つの調査を実施した。

① 学内の国際交流ボランティア参加を通した正課外の学び
2020 年８月～10 月にかけ、学内の国際交流ボランティアに長期的に携わった経験を持つ５名の学生に複線径路・等至性モデリングによりインタビューを実施し、ボランティア経験を通した学びと発達径路にアプローチした。

② オンラインによる多文化サービス・ラーニングの実施と学びの解明
COVID-19 に対応した方向性として 2020 年 12 月～2021 年 2 月にかけてオンラインでの多文化サービス・ラーニングを探索的に実施した。本取組みでは、留学や海外研修が中止となった学生・留学生、外出できなく孤独になりがちな留学生に呼びかけ、ボランティア学生による連続企画を実施した。本企画を運営したボランティア学生たちにグループインタビューおよび BEVI（The Beliefs, Events, and Values Inventory）という質問紙調査を実施し、参加を通した学びを分析した。

③ 官学連携の多文化共生推進プロジェクトにおける関係性の解明
2022 年度から実施した茨木市の多文化共生推進において、本研究で築いたサービス・ラーニングの枠組みを導入した官学連携プロジェクトを実施した。本取組みにおいては、ステークホルダー間の関係性における変化の解明を試みた。茨木市、大阪国際交流協会、大学の連携の質に注目し、連携関係者のフォーカスグループ・インタビューを実施し、サービス・ラーニングにおける枠組みを用いて質的に分析した。

４．研究成果

本取組みで目指した２点について、その成果を目的別に述べる。

（１）サービス・ラーニング正課科目の開発

COVID-19 の感染拡大により予定よりは時間がかかったが、2022 年度に開設することができた。2023 年度は、2022 年度の実績をもとに複数の地域多文化交流や日本語教室との連携基盤を構築し、対面実施に至ることができた。今後は、多文化サービス・ラーニングを通した学生の学びと評価について調査を発展させていく。サービス・ラーニングと日本語教師教育の関係について 2022 年 2 月の桜美林大学での研究会で招待講演をした。

（２）多文化ボランティアを通した学びの明示化について以下、調査別の成果を示す。

① 学内の国際交流ボランティア参加を通した正課外の学び

インタビューをした結果、国際交流ボランティアスタッフを務めた学生たちは、当初は自己研鑽目的で参加するが、自身の経験や企画が他の学生に役立つという実感により、ボランティアや市民性の意義を理解していくプロセスが示された。本研究成果については、発達心理学学会にて発表し、論文として執筆し、投稿中である。また、学内国際系ピア・サポーターの発達とカリキュラム開発の関係について PBL2021 の国際学会でも発表した。「国際教育交流が育む学生ピアサポートの多様化―多文化サービス・ラーニングの可能性を巡って」として実践と理論面の両方から学生・ピアサポート活動の意義と可能性について論文として報告した。多文化交流や日本語学習支援ボランティアに携わる学生の異文化理解の観点における振り返り活動について調査・検討を重ねてきたが、2022 年 3 月に研究会を開催し、異文化理解の振返りワークショップを開催した。

② オンラインによる多文化サービス・ラーニングの実施と学びの解明

COVID-19 により留学や従来型の対面交流が閉ざされる中、オンラインでの多文化交流の企画・運営に携わった学生たちの学びについて分析したが、この結果については、2021 年の「国際ボランティア学会学術大会」にて学生側の学びと発達、そしてその径路について報告した。分析の結果、企画する学生によって多文化交流に対するイメージや目的が異なり、国単位での文化交流なのか、地球市民としての相互理解なのか、といった目的と異文化理解の範囲において違いを示すことができた。

③ 官学連携の多文化共生推進プロジェクトにおける関係性の解明

本取組みを通し、課外で学生が地域ボランティアに取り組む際の研修の在り方や連携の質について調査し、分析結果を 2023 年 3 月の言語文化教育研究学会にてパネルとして発表した。パネル企画としては、多文化共生や地域在住外国人への支援に関する地域と大学の連携の質をテーマとして取りあげた。それまで、日本語教育などの分野で「つながる・つなげる」ことの必要性が掲げられてはいたが、つながりの質に関しての議論の必要性を提示することができた。連携におけるステークホルダー間の関係性は、参加する学生の成長はもちろん、連携プロジェクトの社会的波及効果にも大きく影響を及ぼす点であり、今後、地域連携において注目すべき観点となると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　20件）

１．著者名 Kosuge, R., & Yasuda, Y.	４．巻 21
２．論文標題 Understanding Serendipity in Buying Behavior	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Annals of Business Administrative Science	６．最初と最後の頁 75-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北出慶子	４．巻 133
２．論文標題 異文化間交流における類型化の試み―包摂性を目指した多言語交流実践例から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本学報	６．最初と最後の頁 245-258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮城貴子・安田裕子	４．巻 16
２．論文標題 日本のホスピタリティ産業における外国人材のキャリア形成について―複線径路等至性モデリングによる異文化適応のプロセスの観点から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 観光ホスピタリティ教育	６．最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口洋典	４．巻 49
２．論文標題 PBLの風と土：(21)自己と社会の関係性を市民性向上で醸成	５．発行年 2022年
３．雑誌名 対人援助学マガジン	６．最初と最後の頁 207-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 50
2．論文標題 PBLの風と土：(22)大学と地域が共に見上げる北極星として	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 209-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 51
2．論文標題 PBLの風と土：(23)協力的な関係にて学びと成長の旅仲間に	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 166-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 51
2．論文標題 PBLの風と土：(24)よりよい地域のために大学は地域と共に	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 176-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川原直也、八重樫綾子、赤澤清孝、其田雅美、山口洋典	4．巻 23
2．論文標題 再論・大学と震災とボランティアセンター：国際ボランティア学会第23回大会トークセッション	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ボランティア学研究	6．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂中俊介、蔵田 翔、佐藤すみれ、山口洋典、横関つかさ	4．巻 23
2．論文標題 コロナ禍における居場所づくり：越境知としてのボランティア学を求めて	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ボランティア学研究	6．最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口 洋典	4．巻 12(2)
2．論文標題 PBLの風と土：(18)活動させる教育を共に場をつくる学習へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 207-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 原田梓・安田裕子・三田村仰	4．巻 12
2．論文標題 脳卒中患者における不安を中心とした経時的心理変化―TEM（複線径路等至性モデリング）による分析	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対人援助学研究	6．最初と最後の頁 28-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口 洋典・北出 慶子・遠山 千佳・村山 かなえ・安田 裕子	4．巻 22
2．論文標題 トランスビューからマルチビューへの展開を通した経験の物語化への方法論：ボランティア体験の言語化を促進する実践的研究へアプローチとして	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ボランティア学研究	6．最初と最後の頁 97-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 11(2)
2．論文標題 PBLの風と土：(14)学びの集団の成熟を通じた個々人の成長	5．発行年 2020年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 206-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村山かなえ、北出慶子、遠山千佳、安田裕子、山口洋典	4．巻 21
2．論文標題 国際教育交流が生む学生ピア・サポートの多様性―多文化サービス・ラーニングの可能性を巡ってー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 立命館高等教育研究	6．最初と最後の頁 139-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 11(3)
2．論文標題 PBLの風と土：(15)所属の獲得と相互承認による学びと成長	5．発行年 2020年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 206-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 11(4)
2．論文標題 PBLの風と土：(16)身体性を重視して異文化対応に身構えを	5．発行年 2021年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 178-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 北出慶子	4．巻 31(3)
2．論文標題 外国人・留学生支援ボランティア活動を通した学びと課題 ―日本語教育人材育成のための多文化サービス・ラーニング開発に向けた系統的レビューの試み―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 10（1）
2．論文標題 PBLの風と土：(9)サービス・ラーニングは中道を歩むもの	5．発行年 2019年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 207-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典・赤澤清孝・深尾昌峰	4．巻 106
2．論文標題 大学地域連携による学生住民の地域混住を通したコミュニティの活性化	5．発行年 2019年
3．雑誌名 都市住宅学	6．最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 10(3)
2．論文標題 PBLの風と土：(11)自らの未知なる環境に身を置いてみよう	5．発行年 2020年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 180-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 31（3）
2．論文標題 地域参加学習において言語化を促進する意味とその方途	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 遠山千佳	4．巻 31（3）
2．論文標題 留学生と大学院生の対話を通した日本語支援による相互の学び－学習者の日本語習得過程に注目して－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 39-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村山かなえ	4．巻 31(3)
2．論文標題 国際教育交流における学びのコミュニティと場作り －大学教員の役割と求められる技量とは－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 61-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 カンダボダ P. B.，石川涼子，筆内美砂，村山かなえ，羽谷沙織	4．巻 20
2．論文標題 大学内における学生の正課外活動への支援体制と課題 - BBPでの実践を題材に-	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館高等教育研究	6．最初と最後の頁 115 - 135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計50件（うち招待講演　10件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 安田裕子・サトウタツヤ
2．発表標題 複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）―基礎編
3．学会等名 日本心理学会第86回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 サトウタツヤ・安田裕子
2．発表標題 複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）―応用編
3．学会等名 日本心理学会第86回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 安田裕子・サトウタツヤ
2．発表標題 オンラインコメントセッション
3．学会等名 TEAと質的探究学会第1回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 松嶋秀朗・西名諒平・戈木クレイグヒル滋子・細馬宏道・安田裕子・サトウタツヤ
2．発表標題 質的アプローチの多様性への理解をひろげる―「生きづらさ」をめぐるデータ分析から
3．学会等名 日本質的心理学会第19回大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 杉浦愛・小菅竜介・安田裕子
２．発表標題 インターナルブランディングにおいて周縁的ストーリーが果たす役割
３．学会等名 日本マーケティング学会カンファレンス2022
４．発表年 2022年

１．発表者名 安田裕子
２．発表標題 TEM/TEAによる対象理解―基礎を学ぶ
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 末松和子、北出慶子、村田晶子、尾中夏美、髙橋美能、秋庭裕子
２．発表標題 国際共修ルーブリック―開発とそのプロセス―
３．学会等名 異文化間教育学会 第43回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 参加学生はキャンパスアジア留学経験をどのように捉えたか―就職活動というライフ・トランジションにおける留学への意味付け―
３．学会等名 異文化間教育学会 第43回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 北出慶子・遠藤知佐・西村聖子・山口洋典
２．発表標題 地域の多文化共生活動への参画と市民性教育を目指した地域と大学との連携―大阪茨木市ｘ立命館大学の連携初期段階からの報告
３．学会等名 言語文化教育研究学会 第9回年次大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 越境する人とその支援者の発達を支える：日本語教育におけるTEA
３．学会等名 2022年度 立命館大学 人間科学研究所年次総会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 日本語教育でつながる―越境コミュニケーションと日本語教育―
３．学会等名 韓国日本研究団体 第11回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hironori Yamaguchi, Kanae Murayama, Keiko Kitade, Chika Tohyama and Yuko Yasuda
２．発表標題 The process of learning and growing of peer supporters through place management: for curriculum and co-curriculum hybridization
３．学会等名 PBL2021 International Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 今井紀明・宗田勝也・山口洋典
２．発表標題 キーノートスピーチ「ポストCOVID-19における越境的支援のかたち」
３．学会等名 国際ボランティア学会第23回大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hironori Yamaguchi, Megumi Akiyoshi, Toru Kawai, Seishi Miyashita
２．発表標題 How Service-Learners Deepen Their Relationships and Design Their Lives: Introducing the Metaphor of Earth, Wind, and Waves in Disaster Revitalization Programs
３．学会等名 IARSLCE 2021 Virtual Gathering（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤信子・中鹿直樹・村本邦子・安田裕子・土田菜穂
２．発表標題 理事会企画シンポジウム① 対人援助学における環境と個人の相互作用（研究法の観点から 行動分析学と質的研究法TEA―ものの見方ととらえる世界の共通性）
３．学会等名 対人援助学会第13回大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Keiko Kitade
２．発表標題 Construction of an alternative ‘future I-position’ through semiotic meaning-making: Re-analysing the interviews of a college student in career transition
３．学会等名 The 11th International Conference on the Dialogical Self（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 大学生が見据えるライフコース・キャリアにおける日本語教師という職業－日本語教育課程の学生が新卒で日本語教師に進まないことを決めるまでのプロセス－
３．学会等名 日本語教育学会　春季大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 嶋津百代・北出慶子・杉本香・中谷潤子
２．発表標題 新しい時代の日本語教育人材育成のための連携・意義・教育観ー「日本語教育者ネットワーク」の活動から－
３．学会等名 日本語教育学会　春季大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 日本語学習支援者の育成と多文化サービス・ラーニング
３．学会等名 日本語教育＆サービスラーニング研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 日本語教育でつながる社会－これからの言語・文化学習に向けて
３．学会等名 中央大学人文科研究所（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 村山かなえ・岡本香織・佐藤輝一
２．発表標題 多文化理解をめざした学びのコミュニティの育み方と大学の国際化 ―「越境的学習」「対話」「ナラティヴ」「リフレクション」から見える 教職員の学びの一考察―
３．学会等名 第28回 大学教育研究フォーラム
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kanae Murayama
２．発表標題 Intercultural Collaborative Learning Online: How the Learners Reflected on Their Learning
３．学会等名 56th RELC International Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Timothy Mossman・Kanae Murayama・Koichi Haseyama
２．発表標題 How to Go Beyond Borders: An Online Collaborative Case in Japan and Canada
３．学会等名 JALT2021: the 47th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 サトウタツヤ・土元哲平・田中千尋・宮下太陽・安田裕子・森直久
２．発表標題 展結について
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 安田裕子・サトウタツヤ
２．発表標題 複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）―基礎編
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 サトウタツヤ・安田裕子
２．発表標題 複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）―応用編
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 村山かなえ・加藤薫・三皷悠太
２．発表標題 グローバルコモンズにおける教職員の関わりと学びの在り方 ―学生どうしをつなぐ学びの実践が多文化理解コミュニティを構築するまで―
３．学会等名 第27回 大学教育研究フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 村山かなえ
２．発表標題 グローバルコモンズで共に育む学びと広がりー学生ピア・サポートと国際教育交流の視点からー
３．学会等名 第3回ボランティア・サービスラーニング(VSL)研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Timothy MOSSMAN, Kanae MURAYAMA
２．発表標題 Forming Student Peer Support Communities on Campus
３．学会等名 JALT2020 Online: the 46th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口洋典，北出慶子，遠山千佳，村山かなえ，安田裕子
２．発表標題 ナラティブを通した意味生成における多声的空間の場とその意義ー国際交流学生スタッフ経験についてのTEM（複線経路等至性モデリング）図を通したマルチビュー・ダイアローグの試みー
３．学会等名 日本質的心理学会第17回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 北出慶子・遠山千佳・山口洋典
２．発表標題 言語文化的マイノリティの支援を通したE-サービス・ラーニングモデルの開発
３．学会等名 国際ボランティア学会　第22回年次大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 北出慶子・遠山千佳・村山かなえ・安田裕子・山口洋典
２．発表標題 多文化コミュニティでの越境的な対話を通じた発達の径路
３．学会等名 日本発達心理学会 第32回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 グローバル化時代における言語教育と言語教師の成長-「ポスト教授法」時代の言語教師とその支援方法を考える-
３．学会等名 大阪大学　マルチリンガルセンター（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 複線径路・等至性モデリング（TEA）と言語教育
３．学会等名 複線径路・等至性モデリング（TEA）国際学会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 矢藤優子・肥後克己・安田裕子・サトウタツヤ・鈴木華子
２．発表標題 いま、求められているシームレスな対人支援
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 安田裕子・サトウタツヤ
２．発表標題 複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）―基礎編
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 日比野愛子・宮本匠・山口洋典・大石尚子・香川秀太・河合直樹
２．発表標題 交流委員会企画「ポスト質的心理学とこれからのアクションリサーチ －世界的危機の恒常化時代を迎えて－」
３．学会等名 日本質的心理学会第17回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Keiko Kitade
２．発表標題 Reconceptualizing language education from the perspective of learners’ life transitions through the study of transnational students
３．学会等名 International Society for Language Studies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 日本教師教育のためのサービス・ラーニング科目開発ー言語教師教育と市民性教育ー
３．学会等名 第４回日本サービス・ラーニング・ネットワーク全国フォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口洋典・北出慶子・遠山千佳・村山かなえ
２．発表標題 多文化理解を促すための中道的言語文化と表現の可能性 ―Story Circlesを通じた対話的理解の省察的実践―
３．学会等名 国際ボランティア学会学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 中井好男・北出慶子・大河内瞳・平野莉江子
２．発表標題 成長し続ける教師のための省察的実践と未来展望の創造 ―持続可能性のある教師コミュニティへ―
３．学会等名 言語文化教育研究学会　第６回年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 北出 慶子、香川 秀太、山口 洋典、義永 美央子
２．発表標題 越境による「第三の知」創造を目指した実践 ―交差と衝突による変容から言語文化教育の展望を考える
３．学会等名 言語文化教育研究学会　第６回年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 北出慶子
２．発表標題 多言語・多文化越境経験とライフキャリア ―海外留学・就職活動経験についての語りとその意味付け―
３．学会等名 TEAと日本語教育研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口洋典
２．発表標題 公募シンポジウム「震災経験の意味を考究することは被災者支援にどのようにつながるか？」（指定討論スライドタイトル：「忘れ去る」ことのできない構造と状況の中で当事者と研究者が相まみえる作法）
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hironori Yamaguchi
２．発表標題 Sense making Metaphorical Thinking on Networking in Disaster Revitalization : From the Narratives of 10 Years Activity in Shiodani village, Ojiya, Niigata Japan
３．学会等名 The 10th conference of the international society for Integrated Disaster Risk Management (IDRiM 2019)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hironori Yamaguchi
２．発表標題 Helping learners verbalize their experiences by improving daily writing habits through a reflective and active service-learning curriculum
３．学会等名 2019 IARSLCE Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuko Yasuda
２．発表標題 What happens on ‘Bifurcation Points’: Based on the methodology of Trajectory Equifinality Approach (TEA)
３．学会等名 the 18th International Society for Theoretical Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安田裕子
２．発表標題 未来志向のものづくり―質的なアプローチがなせること
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 安田裕子
２．発表標題 質的研究（TEM）の実習デザイン―5日間で伝わること・伝わらないこと
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 村山かなえ
２．発表標題 An extensive approach to promote studying abroad
３．学会等名 the 45th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 安田裕子・サトウタツヤ（編）福田 茉莉、境 愛一郎、上田 敏丈、香曽我部 琢、 中坪 史典、 中本 明世、髙橋 美保、田口 理恵、 河原 智江、大川 聡子、和田 美香、 山根 佐智子、 三田地 真実、ジョン・W・クレスウェル、 廣瀬 眞理子	４．発行年 2022年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 254
３．書名 TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述―保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究	

１．著者名 サトウタツヤ、安田裕子、上川多恵子、宮下太陽、 伊東美智子、小澤伊久美（編）	４．発行年 2023年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 112
３．書名 カタログTEA―図で響きあう	

1．著者名 Keiko Kitade　In Mielick, M., Kubota, R., Lawrence, L. (eds)	4．発行年 2023年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 300
3．書名 Discourses of Identity Language Learning, Teaching, and Reclamation Perspectives in Japan	

1．著者名 北出 慶子、嶋津 百代、三代 純平	4．発行年 2021年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 208
3．書名 ナラティブでひらく言語教育	

1．著者名 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子（編）　分担執筆：北出慶子	4．発行年 2019年
2．出版社 東信堂	5．総ページ数 328
3．書名 留学生とともに学ぶ国際共修―効果的な授業実践へのアプローチ	

1．著者名 Carol Chapelle (Ed.) 分担執筆：Keiko Kitade	4．発行年 2020年
2．出版社 Wiley-Blackwell	5．総ページ数 1288
3．書名 The Concise Encyclopedia of Applied Linguistics	

１．著者名 サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）　分担執筆：安田裕子	４．発行年 2019年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 292
３．書名 ワードマップ　質的研究法マッピング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	安田　裕子 (Yasuda Yuko) (20437180)	立命館大学・総合心理学部・教授 (34315)	
研究分担者	遠山　千佳 (Tohyama Chika) (40383400)	立命館大学・法学部・教授 (34315)	
研究分担者	山口　洋典 (Yamaguchi Hironori) (90449520)	立命館大学・共通教育推進機構・教授 (34315)	
研究分担者	村山　かなえ (Murayama Kanae) (10589948)	立命館大学・国際教育推進機構・嘱託講師 (34315)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関